

フェアな世界へ、私からのメッセージ

富山国際大学附属高等学校 3年 篠原 愛怜

「幸せ」とは何でしょうか。日々の食事、勉強する環境、家族との時間。日本で住んでいると当たり前に見えるこれらのことが、世界では当たり前ではないことを私はある経験から学びました。また、この日常はとても貴重でかけがえのないものだとして深く実感しました。

高校1年の夏、私は学校を通じて公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、かめのり財団共催のカンボジアオンラインステディツアーに参加しました。現地の住人の方々、寺子屋の子どもたちとつながる機会を得ました。画面越しに見たその暮らしは、日本の生活とは大きく異なっていた。ちゃんとしたトイレがなく穴を掘り用を足していたり、インターネットが使えない場所があったり、10km離れた市場へ服を買いに行ったりした。貧困で家がない人のために政府は家を作っている場合もありましたが、それでも不便な生活でした。そして、寺子屋の子どもたちと話した際に彼らはノートも鉛筆も持っておらず、小さな黒板だけを使って学習していました。その姿を見たとき、自分がいかに恵まれた環境にいるかを痛感すると同時に、「何か自分にできることはないか。」と強く思いました。そこで私は、学校内で不要になった筆記用具や書き損じハガキの回収を呼びかける活動をしました。全校生徒や先生方の協力のもと、多くの文房具が集まり、それらをカンボジアの子どもたちに届けることができました。また、多くのハガキにより募金もできました。使いかけの鉛筆やペン、未使用のノート、彼らの学びの力になると考えると小さな行動でも大きな意味があると感じました。小さな一歩かもしれないけれど、その一歩が世界とつながる橋になることを信じて、私はその活動を継続したいです。また、家庭科部の活動では動画を見てフェアトレードについて学び、それを活かした企画に挑戦しました。友達と一緒にガトーショコラ作り、バレンタインの日に販売し、フェアトレードとして収益を支援団体に寄付するというものでした。チョコレートを使うとき、「このカカオはどこの国で、誰が作ったのだろうか？」と考えることが、自分の消費行動に対する意識を変えるきっかけになりました。スペイン留学中でも、お金の使い方や食べ残しをなるべくしないよう基本的なことから意識し心がけました。普段の「買う」という行動が、遠くの国の誰かの暮らしや労働環境に直接影響を与えています。そんなつながりを知ったとき、私たちはもっと責任ある選択ができるのではないかと思います。これらの経験から学んだのは、「世界を幸せにするために必要なのは大きな力やお金だけではない」ということです。自分の身近なところからできることは、たくさんあります。使わなくなったものを活用する、商品を選ぶときに生産者のことを考える、困っている人に思いを寄せる。こうした小さな行動が積み重なれば、きっと世界を少しずつ変える力になるはずで、そして、もう一つ大切だと思うのは「つながること」です。私がカンボジアの人々と話す中で強く感じたのは、言葉や文化が違っても夢や願いは共通していることです。「もっと勉強したい」「将来は先生になりたい」と語る子どもたちの目は、私たちと同じように輝いていました。だからこそ、遠くに住む人々のことを自分ごととして考えるためには、まず知ること、

つながることが大切です。未来をつくるのは、今を生きる私たちです。誰かのために自分が  
できることは何かを考え、行動すること。それは同時に自分自身の幸せや成長にもつながる  
でしょう。そしてその思いが次の世代へ受け継がれていくことで、より良い世界が築かれて  
いくと私は信じています。